

## 研究結果報告書

### 琉球使節と近世東アジアの交流ネットワーク

所属：ソウル基督大学校 基礎教養教育学科

役職：助教授

氏名：李 豪潤

公益財団法人住友財団「アジア諸国における日本関連研究助成」による研究成果として以下のことが明らかになった。

第一、清朝と徳川幕府に使節団を派遣した朝鮮王朝と琉球王国は、清朝と徳川日本において交流や情報交換を行い、朝鮮から徳川幕府に派遣した通信使は琉球使節と直接接触する機会はなかったが、にもかかわらずその情報は特に朝鮮使節が日本において接触する幕府の役人や知識人から琉球に関する情報を得る方法で間接的に行われた。例えば、1719年通信使として日本に訪れた申維翰は雨森芳洲から琉球に関する情報や琉球の役人の漢詩に関する情報を入手しており(申維翰『海游録』下、附聞見雑録)、新井白石と朝鮮使節の間の筆談集である『江関筆談』にも琉球に関する問答記録があるなど、通信使の琉球の情報収集は活発に行われた(任守幹『東槎日記』坤、江関筆談)。

第二、中国における朝鮮と琉球の交流は直接接触する形で行われた。例えば、朝鮮の李晔光の『芝峯集』には1611年北京に行った時、琉球使節との交流を記録した「琉球使臣贈答録」および、「謝琉球使臣贈詩及刀扇」に琉球使節と唱和した漢詩があり、こうした交流に対する後記および問答記録を残した。特に問答記録には琉球の国土、儒教や仏教、科挙制度の有無、気候、国王の姓氏、歴史、日本との距離、特産物、衣装など琉球に関する多様な情報を得ている(李晔光『芝峯集』巻九、琉球使臣贈答録・謝琉球使臣贈詩及刀扇)。そして、1801年、柳得恭が北京を訪れて残した『燕台再遊録』には琉球が薩摩の侵攻により附庸国になったが、清朝に対し内緒にしていることや、琉球国王の名前、琉球国までの距離、琉球使節の名前と服飾などについて記している(柳得恭『燕台再遊録』)。また、1832年北京を訪れた金景善の『燕轅直指』には琉球使節が北京の鴻臚寺において朝鮮使節と共に、朝賀・饗宴・漢詩唱和・儀礼練習・太廟拝礼・円明園の宴会に参加し交流した記録がある(金景善『燕轅直指』巻三、留館録)。なお、琉球の『中山世譜』には琉球使節が1780年皇帝の太廟参拝の際、朝鮮・南掌・暹羅使節と同行し、西苑紫光閣において琉球使節と朝鮮使節が皇帝を迎え、そして円明園において朝鮮使節と琉球使節が花火観覧を共にした記録もあるなど、1780年～1854年まで朝鮮と琉球の接触や交流は22回に達している(伊波普猷他編「中山世譜」『琉球史料叢書』1972)。

最後に、朝鮮使節と琉球使節の北京における交流を通じて近世の朝鮮王朝や徳川日本の交流が通信使行および倭館などを通しての交流のみならず、徳川幕府の実質的対清使節であった琉球使節を通して清朝においても行われたことが明らかになった。これは近世における日韓関係史の舞台が朝鮮半島や日本列島に限られていたのではなく、中国大陸を含む東アジアの規模で展開していたことを意味する。なお、こうした視点を通して近世日韓交流史および東アジア交流史研究にも新しくアプローチできると考えられる。

こうした公益財団法人住友財団「アジア諸国における日本関連研究助成」による研究成果は「近世東アジア交流ネットワークと琉球使節・朝鮮使節の交流」と「近世東アジア交流ネットワークと日本・朝鮮」と題する国際学会および講演における口頭報告として公表された。そしてこうした成果をまとめる「近世における朝鮮使節・琉球使節の交流と情報交換」と題する論文を現在執筆中であり、今年度中公刊予定である。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

李豪潤「近世東アジア交流ネットワークと琉球使節・朝鮮使節の交流」韓国日本近代学会  
第39回国際学術大会、2019年5月18日、韓国全北大学校

李豪潤「近世東アジア交流ネットワークと日本・朝鮮」愛知県立大学ミニ公開講座、  
2019年7月5日、愛知県立大学長久手キャンパス

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

李豪潤「近世における朝鮮使節・琉球使節の交流と情報交換」執筆中

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)

なし